



子ども新聞始めよう



# 君も今日から 新聞記者



2020



# リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

## SDGsを知れた！

### カードゲームで「協力」の面白さ学ぶ

「2030 SDGs」カードゲーム体験会が10月4日、リードあしやで開かれた。

SDGsとは「持続可能な開発目標」の略称。2015年9月に国連総会で決められた。2030年までの達成を目指す、国際社会の共通目標だ。

しかし日本ではまだまだ認知されていない。今回の参加者の中でも知らない人のほうが多かったように感じた。

カードゲームは、自分の目標を達成しつつ、世界の状況メーターをバランスよく定めていくというルール

で、楽しみながらSDGsを知ることができる。実際に体験してみると、最初は自分の目標を達成す

るのに頭がいっぱいで、メンバーには目もくれなかった。そのため目標達成は早かったが、メンバーのバラ

ンスが悪かった。だが後半は、他の参加者とコミュニケーションをとり、上手くバランスを保つことができた。

このゲームの面白いところは、他の人と協力できることだ。やはり自分の事ばかりを考えていたら、経済は発展するものの周りの環境は良くならないのだな、と感じた。周りの人と助け合いながら物事を達成することは将来、就職した時にも使えるなと思った。



## 私が起点だ 国境を越えて繋がる想い



「2030 SDGs」カードゲーム体験会で、講師を務めたSDGsファシリテーターの中嶋雅美さんに話を聞いた。

持続可能な開発目標「SDGs」が国連サミットで採択された時、全会一致だったと知り、「国を越えて一つの想いできて、とても嬉しかった」と中島さんは話す。

一人一人に取り組んでほしいことは何か、と尋ねる

と、「いろいろなことを自分のことと置き換えて考えてみてほしい」と話す中嶋さん。SDGsファシリテーターのやりがいについては「毎回、参加する人によって結果や楽しみ方が違うこと」と答えた。

このイベントに参加して学んだことは、もともと社会のニュースに興味を持ち、自分の意見を持つことが大切だということだ。

（小林愛奈、三戸田愛実）

# 市民のために最高の芦屋を



# リード芦屋新聞

発行元  
リードあしや  
高菜奈英 校  
屋仁靖将千 屋  
立佐豊田藤田 立  
佐佐太

## どうなる 駅南再開発

10月24日にリードあしやで、「みんなで聞いてみよう！」という、芦屋市民に向けてのZoom意見交換会が行われた。内容は、JR芦屋駅の再開発に向けての目標と目的、事業を取りくむ際に抱える課題、予算の増減についてだった。話し手は、都市整備課の柴田陽子さんの二人だった。

芦屋市の計画は、再開発事業としてのビルの建設と

## 芦屋らしい街づくり

### 市民、皆で考える未来の姿



市の担当者の説明の後、参加した市民らが、現状や見通しについて質問をした。「市議会で認められなかった要因は何か？」という質問に対しては、「最初の見通しよりも事業費が多くなり、10年後には芦屋市の財政が圧迫され貯金が無くなってしまうかもしれない、というのが一番の理由」と説明した。

背景として、再開発に伴って地価が高くなっている現状を明かした。地価は市ではどうすることも出来ないで、ビル、ロータリー、デッキなど全てについて「1円でも下げるよう検討している」と答えた。また、「ペDESTリアンデッキは費用が多くなるのでは？」という質問に、

公共施設である交通広場の整備、駅前線の拡幅、関連事業として、公共施設である自転車駐車場と、ペDESTリアンデッキの開発、公益施設を再開発ビルの3階に整備することだ。実行する流れは、都市計画決定↓事業計画決定↓施行規定の策定↓管理処分計画↓用地の所得↓工事↓工事を完了↓公告↓精算となる。しかし、今年の3月議会でも予算が認められず、12月議会に持ち越されることになった。否決の理由は、再開発計画に伴って地価が高騰し、事業費が膨れ上がった。市民がこれ以上負担することへの反対意見も多かった。この事業を実行するに對しての目標は、市民の安全と安心を守ることであり、新しいビルをつくることの主ではないことが分かった。「もつと芦屋に住む人が増えて欲しい」という思いで、将来の市民のために開発事業を行っていることがわかった。成功して欲しいと思う。

## 芦屋市全体へ活気を 「今」ではなく「将来」への事業



「まずは1人でも多くの方に、このJR芦屋駅南地区再開発事業について知ってもらいたい」と思っています。芦屋市都市整備課担当課長の辻宏治さんは、「みんなで聞いてみよう！」と参加した後、リードあしや新聞のインタビューに對し、そう語った。JR芦屋駅南側にて進められている再開発事業について、市の担当者からの説明があった後、現状や見通し、不明点などをZoomを使いオンライン上で質問し、交流すると言った趣旨のイベントだった。

「これは『今』ではなく、『将来』のための事業です。新しい南地区の姿を楽しみにしている方々のために、事実上ストップした現在の状況を打開し、速やかに事業を進めることで、芦屋市をもっといい街にしていきたいです」と、思いを聞かせてくれた。

で、造りをシンプルにする」と答えた。「JR芦屋南口の再開発の第1の目的は？」という質問には、「綺麗な道路をつくること」と回答。辻さんは「芦屋らしい街づくりをする」と決意していた。



# リード芦屋新聞

発行元

リードあしや  
高橋裕希  
栗原桃葉  
栗原透子  
栗原中田

## 芦屋駅のまちづくり

### 芦屋の景観を守りつつ

「みんなで聞いてみよう！とこでJR芦屋駅南側、どうなっているの？」が10月24日、リードあしやで開かれた。計画が事実上ストップしているJR芦屋駅南地区の開発について、市の担当者の辻宏治さんと柴田陽子さんが説明した。

芦屋市の計画では、住宅と公益施設、商業施設が一緒にあった、地上1階、地下2階のビルが建設される。駅舎はリニューアルされ、エレベーターやエスカレーターが新たに設置されるという。また、歩行者の安全性の確保のため、国道

2号への道に歩道の設置や、バス、タクシーの乗降場の増設など、芦屋の快適で品格ある景観を活かした

環境整備が考えられている。3月の市議会では、想定していたより事業費がかか

つてしまい、10年後の芦屋市の貯金がなくなってしまうという理由で、予算が認められなかった。現在、市はできるだけ費用を抑えようとしているところだ。確かに、道路に駐車している車も多かったり、歩道が狭く、道路を横断する人も見られるので、新しく歩道が設置されるのは嬉しいことだ。JR芦屋駅南地区のまちづくりが完成するのは令和8年度の予定だ。



## 安全な町づくり計画 芦屋らしい町をつくる



市の担当者の説明の後、参加した市民らが、再開発の現状や見通しについて質問した。

「なぜ南側に手をかけているのか」と言う質問に対し、駅周辺を活性化させる前に、「まずはきれいな道路にすることが大切だ」と答えた。芦屋駅南側の今の状況は、停車している車が多い。道が狭く、見通しも悪いので、安心安全とは言えない。そこで誰もが安心

できる環境を作ることは一番にすべきことだそう。町づくりをしていく上で、安心安全な環境と並んで他にも大切なことがある。それは景観を守ることだ。現在はこの2つを中心に設備の計画をしている。芦屋らしい町づくりをすることは市民にとって喜ばしいことだ。完成予定は令和8年。参加者からは完成を心待ちにする言葉があった。

# リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

## 市民らが共同制作 来年1月公開

# 動画で防災を知る



10月20日、芦屋市立浜風小学校で、防災倉庫に関する動画撮影が行われた。芦屋市民に防災について知ってもらうことを目的として、市や市民団体、地元の有志が共同制作した。リードあしや新聞の記者であるクラーク記念国際高校防災部のメンバーが撮影取材し、関係者にインタビューをした。

制作には、芦屋市映像倶楽部あしや、芦屋市の高校生、芦屋市の防災士、防災安全課が参加した。

今回は「防災用ポンプ」についての説明。当初は小規模で行われる予定だったが、結果20人を超えるメンバーが現地に集まった。

また、今回の動画撮影を企画したリードあしやの橋野浩美さんは、今後の取り組みについて、「街をジオラマ化したり、ドローン飛ばすなど、普段の

私たちでは感じられないような新しい視点から防災を考えていきたい」と語った。

この動画は最終的に、2021年1月16日にオンラインにて開催される「災害時ケースマネージメント」にて公開し、その後動画配信サイトにも投稿される予定だ。

## 防災意識を広めたい

芦屋市を拠点に、防災士として活動する楠本さんにインタビューすると、阪神・淡路大震災での経験を話してくれた。

災害が多い日本において、防災の知識は自らの身を守るために必要不可欠となっており、この動画によって、防災に対する意識が少しでも変わることが期待される。

(山西敦士)

災害時ケースマネージメントは、リードあしやで参加申し込みを受け付中。定員80人。

## 次に繋ぐ防災教育



芦屋市教育委員会の浅田さんは、今回の防災倉庫の紹介動画の撮影のために、舞台である浜風小学校の授業や活動と撮影の予定が重ならないように校長と

連携し、調整に当たった。インタビューで浅田さんは、今回行われた撮影会について「高校生

の熱心な活動に感動した。この撮影の場で得たことを芦屋市の小中学校へ伝えるように働きかけたい」と語った。さらに「今後より一層、防災教育に力を

入れていきたい」と続けた。(端山このみ)



全てはあの凄惨な阪神・淡路大震災からの経験なのだ。防災が如何に重要かを知らしめる、想像を絶する災害

だったのだろう。そんな楠本さんの普段の活動は、芦屋市だけに留まらず、兵庫県内各地で開かれる防災

## 災害に備え対策づくり



撮影に参加した芦屋市防災安全課の山西さんにインタビューした。防災安全課は、耐震工事や避難所作成など「ハード面」を担う

起こる可能性のある、南海トラフのような想定外な規模の災害や、日々の変化への対応など、懸念点も多くある」と語った。対策として「ハザードマップ等の作成や、啓発活動の活用を行う。また、現在の知名度や認知度の向上を行っていきたい」という。

普段の啓発活動だけでなく、さらに毎年総合公園にて防災訓練のイベントなどを行っているという。

今回の活動に対して「まったく防災に興味を持っていた方にならばうれしい」と語った。(山西敦士)

研修で講義をする。防災の重要性を広く訴えているのだ。災害に遭遇した際は「自分の命を助けること」が最優先だと楠本さんは語る。

まずは、防災の重要性を広く知って貰うことから。一人でも多くの人に、この記事が目にとまることを願わずにはいられない。(河原悠陽)



# リード芦屋新聞

発行元

リードあしや

## 話し合いを可視化

### グラフィックレコーディング 議論深まり新たな発見

リードあしやで、10月31日に開催された「未来をつくる芦屋たぶん100人会議」では、グラフィックレコーディングの講習もあった。ビジュアルファシリテーターのアオナミユミコさんが講師として、絵と文字で会議内容をまとめ、話し合いを進めるノウハウを披露した。参加者も実際にペンと紙で簡単なグラフィックレコーディングを体験した。

グラフィックレコーディングとは、物事をうまく進めるスキルのひとつである。



プレゼンの内容や会議を、図、絵でリアルタイムに記録する。会話と絵の相互作用により理解が深まり、共通認識ができるようになる。可視化する内容は人に

よって違うため、共有した際に新しい発見もできる。「絵」といっても、難しく考えなくていいという。

丸、三角、四角などの簡単な図形や矢印、図を組み合わせ、目で見てわかるものを書くことができれば、誰でもグラフィックレコーディングはできる。ストーリーが見えれば、より分かりやすくなるだろう。とはいえ、いきなり皆の前で描くのはハードルが高

## 図形組み合わせせて表現

いだろう。まずは自分のためのメモである「スケッチノート」の練習をしておく

と、グラフィックレコーディングもできるようになる。口頭では忘れてしまうようなこともぎっつと見ればわかる。視覚にいか訴えるかがポイントだ。（野妻 綾）



グラフィックレコーディングを記者が体験した。

絵を描くことが苦手な私は、体験する前、とても難しいものと考えていた。しかし講師のアオナミユミコさんは「簡単に描ける」と最初に話した。

絵を描く体験をする前に、グラフィックレコーディングやファシリテーションの意味や概要についての話があった。横文字が並ぶことが多かったが、アオナミさんの解説は分かりやすく、私もすぐ理解できた。アオナミさんが強調していたのは、○や△、□など誰でも簡単に描ける図形を組み合わせ、人やものを

描く方法だ。例えば○の下に□を描き、それに手足を生やして男の人を表したり、○の下に△を描くだけで女の人を表したり。そのほかにもアルファベットだけを組み合わせて、電球やコーヒーカップを表したりもした。

体験セミナーでは、単純な図形を繰り返し描き、基本を学んだ。線の端と端は、しっかりとつづけるなど、きれいに見せるためのコツも示された。

ストーリーを描く方法についても、説明があった。試したのは、浦島太郎の物語。まず前述したように男の人を描き、ちよんまげを生やすだけで「昔の人」を表現した。亀や乙姫さま、竜宮城、玉手箱なども描き、それらを矢印でつなぐことで、話の流れを表現していった。（竹中己太郎）

## 話題の議事録法

### アオナミユミコさんに聞く

ビジュアルファシリテーターとして活躍するアオナミユミコさんにインタビュアーした。ビジュアルファシリテーターとは、グラフィックレコーディング（グラフィックレコ）によって、会議をリアルタイムで記録する職業

である。

アオナミさんがグラフィックレコを始めたのは、まだ日本にグラフィックレコがそれほど普及していなかった2015年。たまたまグラフィックレコをする人を見たのがきっかけだったという。

グラフィックレコに期待していることを聞くと、「グラフィックレコは外部の人が行うより、組織の内部の人が行う方が分

かりやすい。私が技術を広め、もっとたくさんの方に利用してもらいたい」と説明した。また「グラフィックレコ

仲間には学生時代、絵を描いてノートをまとめた人が多い」と話した。高校生に向けてメッセージを尋ねると、「勉強にはさまざまなパターンがあって、人それぞれにあった勉強方法がある。何が向いているかわからない人は色々なことに触れ、チャレンジし、何が向いているかを知ってほしい」と語った。



（平井真緒）

# 「新聞づくり」が 子どもにも力をつける

インタビュー

ライティング

写真撮影

デザイン

接遇

企画

発想

子どもの頃から市民活動に触れて、知って、理解を深める環境をつくること。世代を超えたふれあいと、次世代を担う人材育成、活動人口増加を目的。

人の話を傾聴し、文章化することから、自身が理解でき、次へ伝えることのできることの喜びを実感できる人材育成を目指しています。

芦屋市立あしや市民活動センター リードあしや

協力 神戸新聞社



お問い合わせ

芦屋市立あしや市民活動センター リードあしや  
(指定管理者 特定非営利活動法人あしや NPO センター)  
〒659-0065 兵庫県芦屋市公光町5-8 公光分庁舎北館  
TEL : 0797-26-6452 FAX : 0797-26-6453  
Eメール : aia@ashianpo.jp <https://www.ashianpo.jp>

